石桜五十年史 刊行にあたって

岩手中・高等学校同窓会長
松見得明

大正十五年四月、母校が大沢川原の地に創立されてから既に五十有余年、半世紀に亘る歳月が刻まれた。この間における我が国の情勢は八紘為宇の指向から戦争への突入、そして敗戦、戦後の混沌、やがて帝国主義から主権在民へとまことにめまぐるしく変動し、而も一八〇度の転換という激変ぶりであった。それに伴い母校の態様、教育の方向も幾度か様相をかえることを余儀なくされつつ今日に至ったのであるが、創立当初掲げられた〝積慶〟〝重暉〟〝養正〟の三大校是は変わることなく一貫して継承顕現され、また石割桜に象徴される〝石桜精神〟の発揚はいよいよ光暉をまし、母校存立の意義を高からしめ不抜のものとしていることは自他共に認めるところである。

然しながら、五十有余年という長い時の経過は、その時処々々における思考と事績を永遠の過去の中に埋没し、その軌跡をも定かなからしめるおそれなしとしない。

ここに創立五十周年を契機とし、母校の今日に至った経緯を収録し、建学の原点を確認するとともに、歩み来った青春の足跡を記してこれを後世に伝えるべく〝石桜五十年史〟の刊行が企画されたのである。爾来一年有半関係各位の心からなる協力により、編纂の業も順調にすゝみ、今日発行をみるに至ったことはご同慶にたえないところである。もっともこの年史に収録せられたもの以外にも記載さるべきものがあったのであるが、戦中、戦後の混乱、あるいはその時処における事績の中核をなした当事者のご他界、記憶の忘失等から資料の散逸、不整により欠落不備を生じ、明確を期しがたいままに記載し得ないもののあったことは返すがえすも残念であり、年史編集が十年早かったらと悔まれてならない。今後八十年史、あるいは百年史を編纂する機会が訪れるであろうが、各位の資料発掘提供を希求してやまない。

思うに母校の母校たる所以のものは、校運の消長盛衰、人事の変転、様相の推移変革は如何にもあれ、常に一貫して変ることなく連綿として続く建学の精神のもとに己れを養い、青春の情熱を燃焼させて高く遠きにあこがれ来って今日在るを得た拠点であり、自己の存在と同じく抹消し去ることの出来ない厳たる事実であり、しかも貴重な人生の一時期をもち得た学窓であるところに在ると言えるのではなかろうか。従ってこの年史は唯に若き日の回想の資たるにとどまらず、自己形成の源泉を汲んでは彼岸到達への灯をかかげるよすがともし、また在校生諸子並びに今後続いて入学してくるであろう後輩諸子にとっては、先人のきづき培かってきた歴史と伝統の過程の中に位置する自己存在であるとの意識のもとに、さらに光暉ある母校の歴史形成と自己実現の資とされることを希求するものである。

さらによい歴史の建設者として

岩手中・高等学校長
遠藤貫中

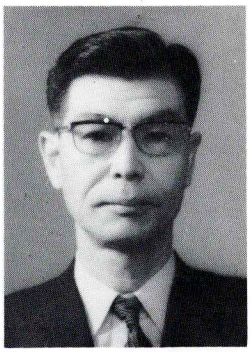
三田義正翁本校を創立なされて以来五十年の歳月が経過いたしました。この五十年を契機として岩手中学校、岩手高等学校の過去をふりかえると同時に将来への発展の礎石といたしたいという考えから同窓会において五十年史を刊行することになりましたことは誠に喜ばしいことでございます。

五十年史をひもとくことにより、大正十五年私学による人材育成を建学の趣旨として創立された本校設立の精神の奥底にあるものを読みとり、その趣旨を実現することが本校の使命であることを自覚することに本史刊行の意義を求めたいと思います。

昭和二年校旗制定、雄峯岩手山頂における校旗樹立記念式、翌三年土井晩翠作詞、山田耕筰作曲になる校歌、昭和十年秩父宮殿下ご台臨、昭和十三年校舎新築、昭和十五年駐蹕碑城山へ建立、昭和二十二年新制岩手中学校の設立、翌二十三年岩手高等学校の新設、昭和二十九年図書館建設、翌三十年水泳プールの建設等数々の思い出とともに本校五十年の歳月が経過せるも、その歴史は常に坦々たる道を歩んできたものでなく、設立以来経済界の不況、第二次世界大戦等の幾多の受難を克服し今日にいたれるものであります。

本校卒業生は、旧制岩手中学校一、四五五名、新制岩手中学校二、七八四名、岩手高等学校四、三七四名、旧制中学と高等学校卒業生数を合計し五、八二九名となるのであります。

卒業生諸君は、五十年の歴史の回想とともに本校設立の趣旨を今一度ふりかえつていただきたい。在校生諸君も、この歴史の永遠の今に立っていることを忘れることなく、過去をふりかえるとともに未来への栄光を信じ学校生活を送らなければならない。現代の社会は若い人の英知と勇気を必要といたしております。卒業生諸君も、在校生諸君も更によりよい歴史の建設者となることを念じ、刊行を祝することばにかえさせていただきます。



大きな自己発展へ

岩手中・高等学校ＰＴＡ会長
沢野啓郎

岩手中・高等学校創立五十周年を心からお祝い申し上げます。

創立者三田義正先生が、日本の将来のためには人格形成が大切だ、それには教育が必要と、質実・剛健の建学の精神を旨として設立し、情熱と理念を実行し、幾多の有為の人材を輩出して、名門校岩手高校の現在の基礎を為したのであります。

五十年の間には国際的な世相・政局に、あまたの変動が続き、教育理念の上でもまた制度的にも数多の変革に際会しては、諸先生方の英知と行動力をもって乗り切り、岩手高校の立派な実績を築いてきたことには襟を正さざるを得ない心境であります。

私は用件の為、現理事長三田義一先生の御自宅を訪問した際のお話の中に、私の学校には良い成績の生徒も、悪い成績の生徒もおります。しかし、私は生徒のプライド（人格）だけは傷つけない様に心懸けて教育しております。あなたも社員に対して、その様な配慮が必要ではないでしょうか。と温顔の中に厳しく御話を賜わり、なる程と感じました。

個人の自由という幻想にとらわれすぎ、互に傷つけ合う混迷の現代の中にあって、真実の教育者はこんな方と心から敬服し有難く感じ入りました。

若い生徒達もいつかは岩手高校に学んだ事を喜ぶ日があるだろうと確信し、父兄として、一市民として、心から有難く感謝申し上げます。また、いたずらに過去を回顧するだけの契機に止まってはならないはずです。同窓生、父兄、市民からの大きな期待にこたえ、大きな自己発展への誓いの中に輝いて始めて尊いものではないでしょうか。さらに清新の気を注入する様期待し、祝意を表します。